

プロジェクト 雑穀街道を FAO 世界農業遺産に (案)

目的と目標

多摩川および相模川源流域における生物文化多様性保全活動により、秩父多摩甲斐国立公園周辺山村における暮らしの持続性および復元力（レジリエンス）を高める。

雑穀街道協議会が多様な主体の参画・協働により、目的・内容の合意を得て、恒常的に保全活動・運営ができるようになる。FAO 世界農業遺産または日本農業遺産の認定を受ける。

概要

関東山地南部の山梨県東部地域および隣接する神奈川県北部地域は秩父多摩甲斐国立公園周辺の山村で、首都圏にありながらも過疎・高齢化が著しい。野生生物が豊かに生存している一方で、野生動物による食害は森林から農耕地にも及んでいる。耕作放棄地はますます拡大し、自然環境に適応して形成されてきた伝統的な山間地・里山での生物文化多様性を構成する栽培植物の在来品種、農耕技術、それらの加工調理技術、さらに農耕儀礼など、伝統文化の継承が消滅・危急の時期を迎えている。この地域には、世界的に知られたフンザと並び称された健康長寿村、上野原市桐原がある。古守豊甫医師はじめ国内外から多くの研究者が調査に訪れて、生物文化多様性に依拠した穀菜食による健康長寿村であることを明らかにしてきた。

これまで 40 年余りの地道な活動実践や研究成果の蓄積を発展・活用し、雑穀はじめ栽培植物の在来品種を保存継承するためのローカル・シードバンクを地域で共有する体制を確立し、山村の農耕技術および加工・調理技術を継承し、山村社会のレジリエンスを高める活動を充実させる。NPO 法人、農業生産法人、自治体などが連携する雑穀街道協議会を組織して、FAO 世界農業遺産「雑穀街道～農山村における生物文化多様性保全」の認定を得るために必要な現況調査を行い、申請添付資料を作成するとともに、生物文化多様性保全を継承する連携組織を確立する。

課題

この 60 年ほどで、山村社会は過疎・高齢化による末期的状況を呈し、生物多様性のみか、随伴する文化多様性までが著しく衰退傾向にあり、継承の危機に瀕している。

頻繁な自然災害に対応するためには、山村社会のレジリエンスを高めておき、山村民は自然からかい離してしまった都市住民に伝統的知識を体験的な環境学習として伝える必要がある。課題解決に向けて、現実的

に自然共生社会を再構築するためには、山村地域の自然共生的な生活文化の基層（縄文文化の系譜、畑作伝統の温故）を大切にせねばならない。さらに、自然共生してきた山村社会での小規模家族自給農耕を学び、健康長寿を支えてきた伝統食を活かしながら、新たな食品を開発して、地域経済を展開する。このことは、生物文化多様性保全を確保することがパーマカルチャの確立につながり（移行への知新、トランジション）、地球温暖化、人口増加、食糧危機、健康問題の改善に対して大きく貢献すると確信する。

山間地・里山における生物文化多様性保全の手法を継承して、野生生物と人間が共存、共生可能な生活技能を再創造することは、自然共生社会を構築するために最重要課題である。しかしながら、この地域の健康長寿村としての誇りや自覚が低下し、生物文化多様性保全についての自己評価も高くはなく、伝統を継承してきた住民の超高齢化により喫緊の課題と言わざるを得ない。学術レベルから再び住民レベルでの普及啓発、行政レベルで保全のための連携強化が求められる。

課題解決に向けた活動

雑穀街道協議会を準備会から立ち上げて、多様な主体の参画を求め、地域連携による協議会を創設してFAO世界農業遺産の認定申請を行う。雑穀街道づくりに関しては、2014年から提唱して、地域連携を求めてきた。しかし、まだ実効性を持った生物文化多様性保全組織としての合意は十分にできてはいない。FAO世界農業遺産に認定申請するという戦略目標を明示することによって、雑穀街道を推進する母体として雑穀街道協議会を創設する。

生物文化多様性保全の現状把握、その重要性を理解する地域住民は多くはないので、普及啓発の意味を含めて1000通の郵送法によるアンケート調査および面接調査を実施し、過去の調査データ（1980年頃、2005年頃）と比較し、現況の緊急性を明確にする。雑穀栽培講習会、自給農耕セミナーなどの環境学習活動を行い、生物文化多様性の大切さを普及啓発する。すべての実践活動に関して参加者による評価をアンケート調査し、多変量解析、テキスト分析を行う。これまでの活動実績に加えて、認定申請に関する添付資料を作り、FAO世界農業遺産として世界的に重要であるとの根拠を提示する。

地域行政をはじめ、多様な主体を雑穀街道協議会に参画するように求めることには、大きな困難が予測できる。しかし、40年余りにわたる定点観測的な調査成果や地域連携・協働の実績の蓄積もあり、雑穀栽培講習会や雑穀街道づくり提案により、すでに多様な主体への働きかけは準備してきているので、準備会から始めて合意形成に時間をかければ、雑穀街道協議会の創設は可能である。FAO世界農業遺産に認定されるかは不確定ではあるが、雑穀街道協議会が創立できれば、生物文化多様性保全のための、安定的な組織は確立

できる。

活動1 生物文化多様性の現況調査と環境学習活動の実施とその評価

1. 生物文化多様性保全の現況調査と環境学習活動の実施と効果測定。地域住民への郵送法調査、聞き取り調査、参加者への意識調査。これらを踏まえて、生物文化多様性保全による山村生活におけるレジリエンスについて検討する。調査データの集積と統計解析の準備（有効調査票 300 以上、面接調査数 30 戸以上）。雑穀栽培講習会などは5回以上開催して、100人以上の参加者を求める。山村のレジリエンスについて明らかにする。
2. 前年度の調査及び学習活動を継続し、蓄積した調査データの統計解析・テキスト分析をおこない実践活動を評価する。生物文化多様性保全を活かした風土産業としての環境学習活動について検討する。調査データの集計、多変量解析およびテキスト分析（300以上の統計母集団）、風土産業としての環境学習活動について評価する。
3. FAO 世界農業遺産に認定申請のための添付資料を調査結果に基づき作成する。

活動2 雑穀街道協議会の創設

1. 雑穀街道協議会準備会を開始し、FAO 世界農業遺産について関係者の共通理解を進める活動の経過については「雑穀街道協議会」ホームページを作成して、公開する。地域における多様な主体の参画を求め、雑穀街道協議会の目的、活動内容を検討する。
2. 雑穀街道協議会の目的、活動内容を確定し、規約などを作成、創設するための合意を多様な主体間で得る。多様な主体の参画・協働により、雑穀街道協議会を創設する。
3. 雑穀街道協議会はFAO 世界農業遺産に認定申請に対応する。雑穀街道協議会を恒常的に運営し、FAO 世界農業遺産の認定を得る。

活動3 FAO 世界農業遺産に認定申請

1. FAO 世界農業遺産に認定申請するための要件を検討、充足する。農林水産省担当部局、地域自治体、大学等と協議する。FAO 世界農業遺産認定申請の目的・内容を検討する。
2. FAO 世界農業遺産に認定申請する。FAO 世界農業遺産に認定申請する。
3. FAO 世界農業遺産に認定審査に対応する。FAO 世界農業遺産の認定を得る。

活動の継続

第一段階として、雑穀街道協議会準備会を組織する事務局として活動する。さらに、多様な主体（個人や団体）に呼びかけ、FAO 世界農業遺産の認定申請のための雑穀街道協議会を創設し、認定に関わる基礎資料を整備し、申請書類を作成する。行政担当窓口にご相談しながら、認定審査を受ける準備をする。

雑穀街道協議会が創立できれば、FAO 世界農業遺産への認定申請までを主な事務局担当として活動し、雑穀街道協議会が自治体や大学などを含めた多様な主体の参画により自立的に運営できるようになり、日常活動が軌道に乗ったら、事務局は同協議会が担当するものとする。

連携体制

山梨県小菅村、東京学芸大学（小菅村とは植物と人々の博物館として社会連携協定を結んでいる。）、トランジションタウン藤野、農業生産法人藤野倶楽部、びりゅう館（NPO さいはら）、桐原長寿館（JA クレイン）、道の駅たばやま、とはすでに連携協定をしている。

FAO 世界農業遺産の認定には多様な主体の参画による協議会の創設が必要条件であるので、東京農業大学（小菅村とは源流大学として社会連携協定を結んでいる。）、地域の農協 JA 関係、観光協会関係、とりわけ行政関係部局、山梨県丹波山村、上野原市、相模原市、山梨県、神奈川県などにも、参画を求めることになる。

協議会準備担当グループ（◎代表、○事務局担当）

青柳諭	◎	行政関係との連携
中込卓男		教育関係団体との連携
中込貴芳		教育関係団体との連携
黒澤友彦	○	NPO 団体との連携
亀井雄次		観光協会との連携
木下稔		水産業関係団体との連携
中田無双		農林業関係団体との連携
木俣美樹男		大学関係との連携
末村成生		トランジションタウン藤野との連携
小川泰彦		環境学習活動、普及啓発

普及・啓発担当グループ（◎代表、○事務局担当）

中込卓男	◎	教育関係団体との連携
中込貴芳		教育関係団体との連携

小川泰彦	環境学習活動、普及啓発
木下純子	上野原、藤野との連携
宮本透	上野原、藤野との連携
末村成生 ○	上野原、藤野との連携

調査研究担当グループ (○事務局担当)

木俣美樹男 ○	植物と人々の博物館 (東京学芸大学名誉教授)	民族植物学、環境学習原論
安孫子昭二	立川市史編集委員 (元東京都教育庁学芸員)	縄文考古学
白水智	中央学院大学教授	日本近世史
西村俊	植物と人々の博物館 (北陸先端科学技術大学院大学助教)	環境科学
能勢かおり	野生生物調査会社	植生学
小柳知代	東京学芸大学講師	景観生態学
長濱和代	東京大学大学院博士課程	森林環境学、環境教育学
藤盛礼恵	植物と人々の博物館 (東京学芸大学非常勤講師)	民族植物学、生活学